

天竜峡 東原遺跡

埋蔵文化財発掘調査報告書

1983.3

全国産業ジュニア・リーダー会議
長野県飯田市教育委員会

天 竜 峡 東 原 遺 跡

埋蔵文化財発掘調査報告書

1983.3

全国産業ジュニア・リーダー会議

長野県飯田市教育委員会

序

名勝天竜峡は飯田市の観光地の拠点であります。当地へスポーツ研修施設として、飯田市及び天竜峡地域開発期成同盟会が、財団法人全国産業ジュニア・リーダー会議に積極的に、誘致運動をしてきたところ、昭和57年度事業として工事着手することになりました。しかし建設予定地川路5093－2他8筆が、埋蔵文化財包蔵地であるため、発掘調査を行い記録保存いたしました。

今回の調査により、弥生時代後期の住宅跡が発見されました。

報告書が出版されるにあたり、文化財保護の意義を深く思うとともに、終始ご熱心に調査にあられた、佐藤調査団長をはじめ関係各位のご努力に深く感謝し、お礼申し上げる次第であります。

昭和58年3月

全国産業ジュニア・リーダー会議

例 言

1. 本書は昭和57年度、全国産業ジュニアリーダー会議によるスポーツ施設テニスコート設置に伴う天竜峡 東原遺跡発掘調査報告書である。
2. 本書は、資料提供に重点をおいて編集したものであり、編集・執筆は佐藤が担当した。
3. 遺構実測図作図は佐藤・牧内が、遺物の作図は佐藤が、製図は田口が分担し、写真は佐藤が担当した。
4. 遺構実測図のうちピット内の数字は床面からの深さを cm で、遺物出土状況は床面からの高さを cm で示し、縮尺は図示してある。
5. 遺物は飯田市考古資料館に保管してある。

目 次

序	3
例 言	4
目 次	4
I 環 境	5
II 発掘調査経過	5
III 発掘調査結果	7
1. 住居址	9
2. 建物址	9
3. 土 坑	10
4. 溝 址	12
IV ま と め	12

図 版

I 遺跡 II 調査ピット III 遺構 IV 遺物 V 発掘スナップ

調査組織

おわりに

I 環 境

東原遺跡は長野県飯田市川路5110番地他に所在する。

川路地区は旧村川路村で、西と南は低い丘陵に囲まれ、天竜川の西岸にあって、天竜峡の溪谷にはばまれて形成された氾濫堆積による平坦面が大半を占めている。このため数次にわたる水害を受け、特に昭和36災害では村の半数の低地家屋は大被害を受け、洪積段丘面に移転している。

天竜峡より南と西は洪積段丘面となり、遺跡は天竜峡川路公園のすぐ西に接し、南は一段高位の大明神原となり、北は一段低位となり、そこには天竜峡駅・商店街・旅館の集中する天竜峡観光の中心地帯となっている。

遺跡の北の段丘崖は現在竹藪となっており、湧水がある。崖下は湿田地帯となっている。遺跡は、南北100 m、東西400 mの範囲にあり、西側は果樹園、東側は桑園となり、西より東に向かって緩い比高差2 m余の傾斜をもって天竜峡の溪谷縁に続く台地にある。遺構分布図にみるように低地となる所は30 cm下からは水がふき出る桑園である。遺跡は西の果樹地帯から北の段丘縁部に沿って集落は展開するものとみる地形にあり、標高420 m前後を測る。

周辺の遺跡をみると、遺跡のすぐ南の一段高位の大明神原遺跡は、かつて縄文中期後半の住居地1軒が調査されており、縄文中期初頭から後半・縄文後期の土器片・石器類の多いことで知られている。その南に続く中原遺跡は縄文前・中期、弥生後期の土器片・石器類の出土をみている。天竜峡の北から西にかけて大畑・大野・月ノ木遺跡があり、川路の北端にある今洞遺跡は縄文前期末の住居地1軒が調査されており、縄文早・前・中・後期、弥生中・後期の土器片・石器類の多くが表面採集されて注目されている。

古墳は天竜川氾濫原に面す洪積段丘面に立地し、南から月ノ木古墳群・御射山古墳群・今洞古墳群・花御所古墳等があり、川路地区内に46基の古墳が数えられている。その内正清寺古墳は前方後円墳であり、隣接する上川路・桐林には御猿堂・馬背塚古墳、さらに塚原・金山古墳群があり、行政区画を異にするが、いずれも同一地域内に天竜川氾濫原をとり囲む状態にある。

II 発掘調査経過

昭和57年度東原の中央部に全国産業ジュニアリーダー会議が、天竜峡スポーツ施設—テニスコートを設置することになった。もとより、ここは東原遺跡として知られており、このため、工事着工前に発掘調査することになったのが、本次調査である。

調査は、11月6日より11月20日までの延べ9日にわたって行われた。連日の雨のため、低地部は30 cm位下からは水がふき出し、また粘質の土層のため調査に苦勞した。11月6日、調査区域にピットを掘り、土層の状態を調べ、桑園の株の畝間に約1 m × 1 mのピットを1.5 m ~ 1.8 m間隔に掘り、遺構とみる範囲

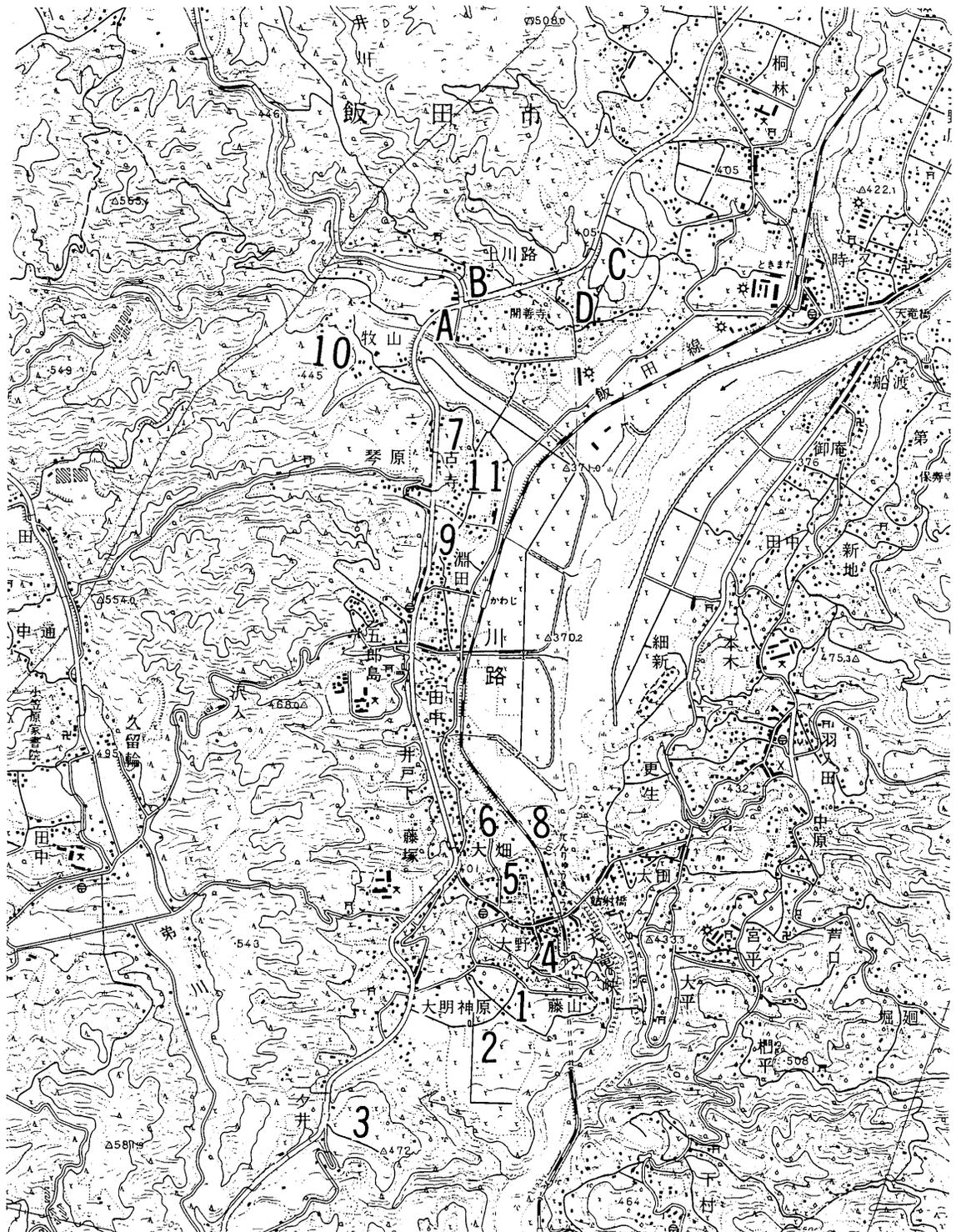


図1 東原遺跡地形・位置図及び周辺主要遺跡 (1 : 25,000)

- | | | | | | |
|---------------|-----------|-----------|------------|----------|----------|
| 1. 東原遺跡 | 2. 大明神遺跡 | 3. 中原遺跡 | 4. 大野遺跡 | 5. 大畑遺跡 | 6. 月ノ木遺跡 |
| 7. 今洞遺跡・今洞古墳群 | 8. 月ノ木古墳群 | 9. 御射山古墳群 | 10. 花御所古墳群 | | |
| 11. 正清寺古墳 | A. 御猿堂古墳 | B. 馬背塚 | C. 塚原古墳群 | D. 金山古墳群 | |

を拡張調査することにした。

用地内面積5186㎡の内、深耕によって荒らされた野菜畑の1部と、低地の水のふき出る部分を除き面積の約5分の1にわたって行なわれた。

調査日誌

- 11月6日（晴） 現地見下し、ピットを掘り、土層の状態をみる。テント位置を決める。
- 11月8日（晴） 午後発掘器材の修繕、準備をなす。
- 11月9日（くもり・小雨） 器材運搬、テントを貯水池西側の埋立地に設営。テント南側の桑畑にピット調査にかかる。1号住居址とみるを検出、打製石庖丁の出土をみる。
- 11月10日（雨） 作業不能
- 11月11日（雨） 作業不能
- 11月12日（くもり・小雨） テント前の桑畑全面にピット調査、水が吹き出て調査苦勞する。柱穴列とみるを検出、拡張調査。
- 11月13日（晴・朝霧深し） 柱穴列は中世末建物址となり、用地外にかかるが、地主の許可で調査するが天地替しの畑で、遺構検出不能となり、用地内を掘上げ、写真撮影。道路西側の桑畑にピット調査、北側の低地は水が吹出て調査不能。
- 11月14日（晴） 日曜日休み
- 11月15日（晴・くもり・夜雨） 1号住居址調査、プランを出し、磨石磨1こと、土器小片数点の出土をみる、中央南に土坑状の掘りこみあり、灰を多量に含む。道路西側のピット調査、西端部に土坑2号を検出する。
- 11月16日（朝小雨・くもり） 1号住居址調査、掘上げ、炉址検出、土坑1号完掘、写真撮影。土坑2号完掘。土坑3号を墓地の北に検出、完掘。東端の畑にピット調査、水田跡で土層はかく乱され、遺構検出に苦勞する。土坑4号検出、掘上げ。テント西側の畑の調査にかかる。
- 11月17日（朝雨となる） 作業を中止し、作業員を帰えす。
- 11月18日（晴） 1住・建物址・土坑3・4号写真撮影。1住・建物址・土1・2・3号測量。テント西側の畑調査。南北方向の溝址検出、江戸時代陶片僅かにみる、掘上げ。道路西側の桑畑北の調査、道路ぎわは水が吹き出て調査不能。土坑5号・6号検出。
- 11月19日（くもり） 土坑5号・6号調査完掘、写真・測量。溝址測量。遺構分布測量にかかる。テント・器材を撤収する。
- 11月20日（晴） 遺構分布測量、現場調査を終える。

現場作業終了後、遺物・図の整理をなし、概報を作成・提出し、その後報告書の作成にとりかかった。

Ⅲ 発掘調査結果

東原遺跡において本次発掘調査された遺構は次のようである。

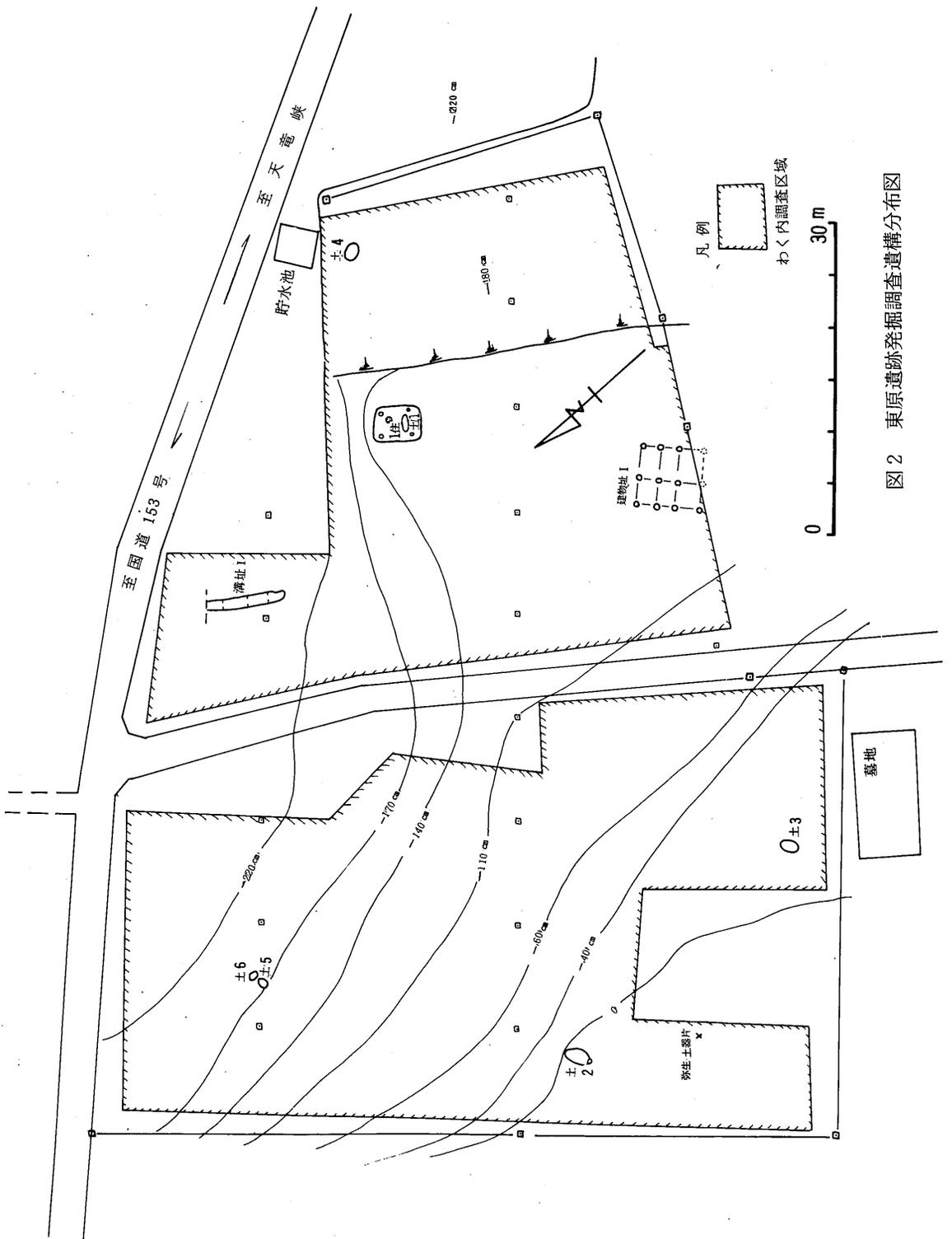


図2 東原遺跡発掘調査遺構分布図

1. 住居址 1軒 (弥生時代後期)
2. 建物址 1棟 (中世末)
3. 土坑 6基
4. 近世溝址

1. 住居址

1号住居址 (図3)

弥生時代後期1号住居址は東境界より西21m、北の道路より南17mの位置に発見され、南北4.45m×東西3.45mの隅丸方形をなし、ローム層に15cm前後掘りこむ堅穴住居址である。床面は堅く、支柱穴4こが整った配置にある。炉址は、この期では、住居址の桁の中央部下の位置にあるが一般的であるが、本址の炉址は北桁下東より3分の1、さらに90cm内側に入った位置に浅く掘りこまれた地床炉で、焼土は著しい。

住居址の中心よりやや南に寄って土坑1号が掘りこまれている。内部出土器は住居址と

同じであり、覆土は灰を含む黒土であり、住居址の施設か、後に掘りこまれた土坑かの区別は把握できなかった。

遺物(図7の1~3)は少なく、土器片数点と打製石庖丁・磨石鏃各1こである。土器片は粘質土のため肌ははげ、文様等は見られないが、石器からみて弥生後期後半とみた。上層より図7の4・5の打石斧の出土をみており、縄文中期のものである。

2. 建物址

建物物址1号(図4)

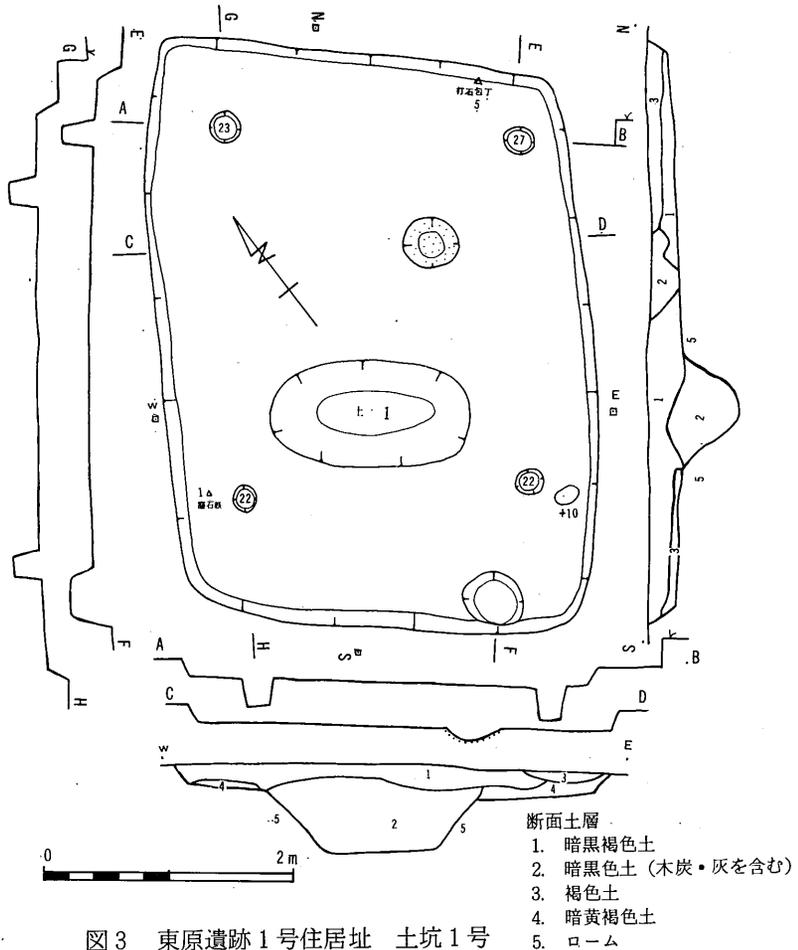


図3 東原遺跡1号住居址 土坑1号

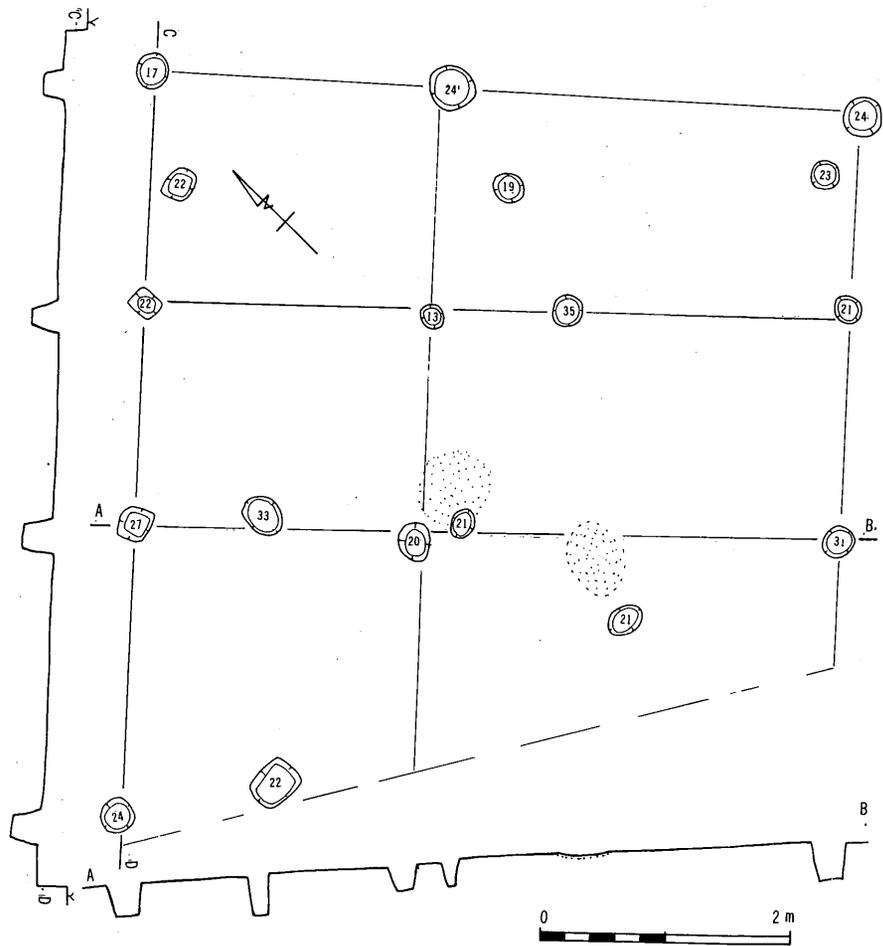


図4 東原遺跡建物址1号

南境界に沿って、東境界より西21mにあり、3間×2間の掘立柱の建物址である。地表下20~25cmのローム層に堅い床面をもち、焼土が中央部近くの2か所にみられている。掘立柱は径20~30cm、深さ20cm余であり、整った配置にある。南側の柱穴2こは用地外となり地主の許可で部分的に調査したが、かつて天地替しが行われ、完全に破壊されていた。柱穴間隔は、東西3.4m・2.4m、南北2.3m・1.8m・1.8mとなっている。

出土遺物は少なく、中世末の陶器片数点の出土をみたにすぎない。

3. 土 坑

発掘調査した土坑6基を次の一覧表にした。

東原遺跡土坑一覽表

土坑No.	図No.	位置	大きさ cm 南北・東西	深さ cm	主軸方向	遺物	備考	時期	遺物図
1	3	1号址内	85×160	47	N50°W	弥生後期土器片	覆土に灰を多く含み, 1号址に付く施設か不明。	弥生後期	
2	5	西境界東6m 南境界北24m	140×223	75	N60°E	縄文後期土器半 個体 (打石斧1)	西端に柱穴1こと一抱え大の石を置き, それに並び土器をおく。	縄文後期	図7の 6・7
3	5	南境界北4.4m 西境界東27.4m	105×200	58	N62°E	なし		不明	
4	5	北道路南8m 東境界西5m	186×127	32	N35°W	なし		不明	
5	5	北道路南10m 西境界東9.5m	113×85	25	N5°W	縄文中期土器片 黒曜石片	西側に一抱え大の石1こをおく。	縄文中期	
6	5	土坑5号北東15cm	120×78	25	N39°E	打石斧 2		"	図7の 8・9

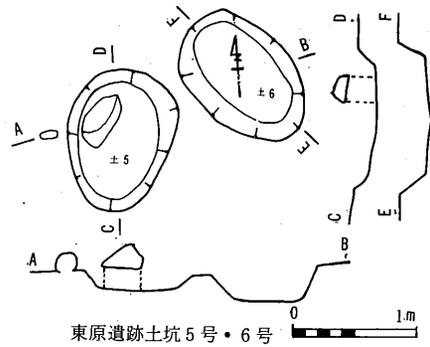
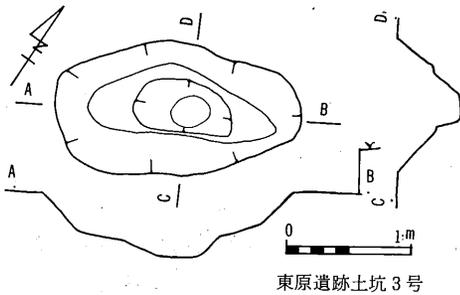
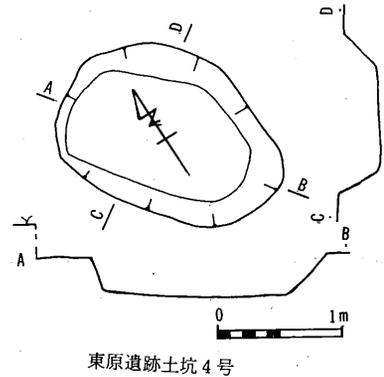
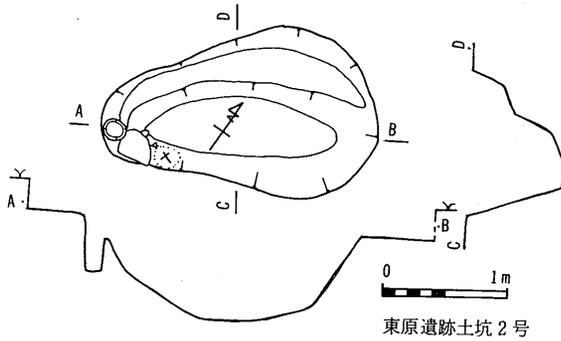


図5 東原遺跡 土坑2号, 3号, 4号, 5号, 6号

溝址1号 (図6)

中央の南北方向の道路より東10mに発見され、北の道路南13mより溝は掘りこまれ、北に直線に道路に向かっていることが確認された。幅60~70cm、深さ15cmの浅い溝である。溝址周辺を拡張調査したが、他に溝は検出されなかった。溝址内の遺物に江戸時代の陶器片があり、その期の境界溝ともみられるものである。

IV ま と め

東原遺跡は、いままで打石斧の出土のみで、土器の出土はなく、縄文期の遺跡とされていた。また、南の一段高位にある大明神原に比し重視されていない遺跡であった。本次調査結果よりみて弥生後期を主とした遺跡であることが確認された。

弥生時代後期の遺構は台地の西側のやや高位となる地点のピット調査によって同時期の土器片の出土をみ、1号住居址は調査区の北東側に発見されており、台地中央部には遺構の発見はない。

現在の集落は北の段丘縁部に沿って東西方向に並んでいる。この集落には古くから続く家が、段丘崖に湧水をもつ西側半分にあり、段丘崖下は古くから開けた湿田帯である。

遺跡の立地、発掘された遺構の位置、遺物の出土状況からみて、弥生時代後期集落が、湧水を近くにもつ段丘北縁部の西側半分から西のやや高位となる果樹地帯に展開したものと推測される。

縄文中期の遺構は、土坑5号・6号を調査したにすぎない。西の一段高位の大明神原遺跡はかつて調査された住居址があり、表採遺物の多いことで知られ、縄文中期の集落の存在も予想される遺跡である。それに隣接する東原段丘面には遺物からみても集落の存在はなく、ただ土坑等の小遺構が点在するにすぎないとみるが妥当であろう。土坑2号出土の縄文後期とみる土器は、この期の遺構が台地西側・高地の果樹園に展開するものとも予想される。

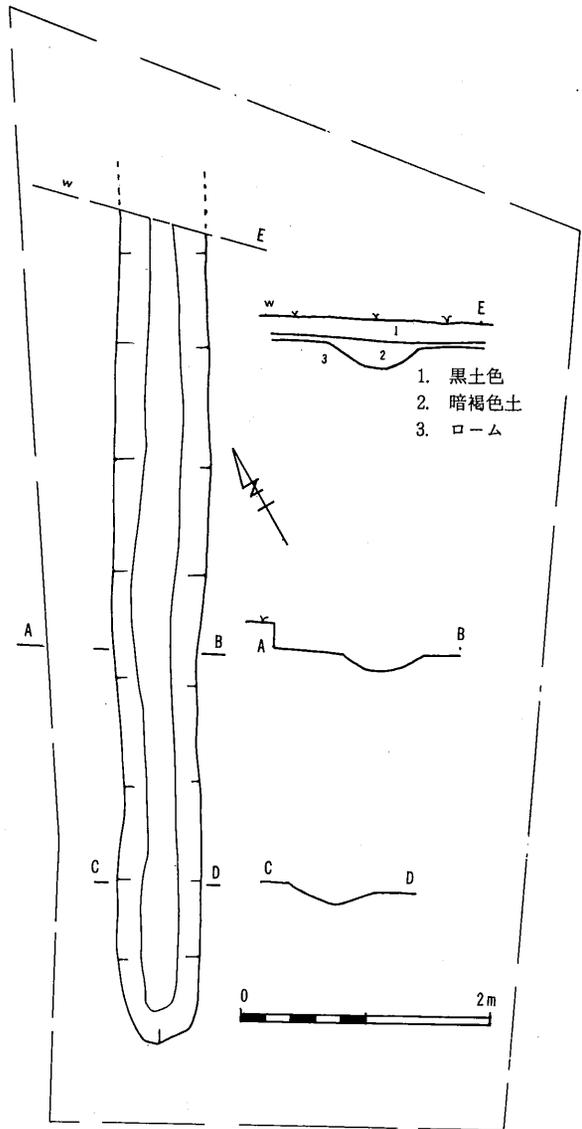


図6 東原遺跡溝址1号

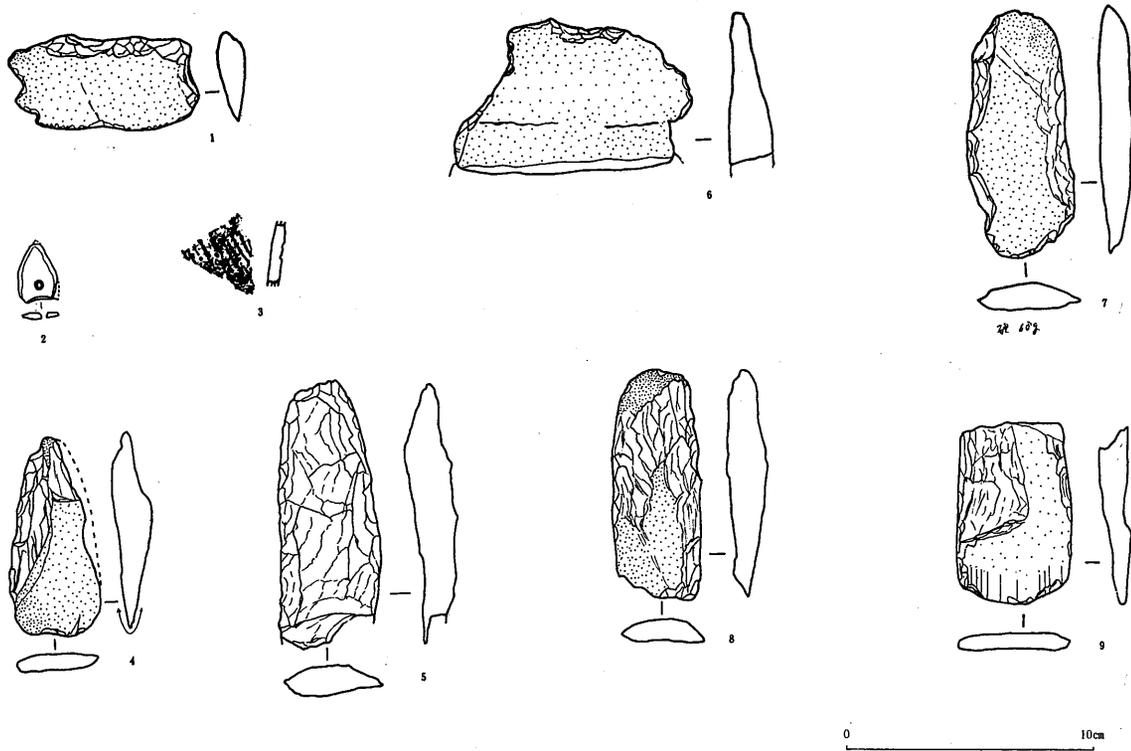


図7 東原遺跡出土遺物（1：3）

1～3……1住，4・5……1住上層
6・7……土2，8・9……土6

中世末の建物址1棟が検出され、整った掘立柱の建物址である、東原には古くから続く家との関連も考えさせられ、ここに定着の期を迎えたものと推測される。

発掘調査された遺構・出土遺物は少ないが、弥生時代後期を中心とした集落の存在を予想する手がかりを得た意義は評価されよう。

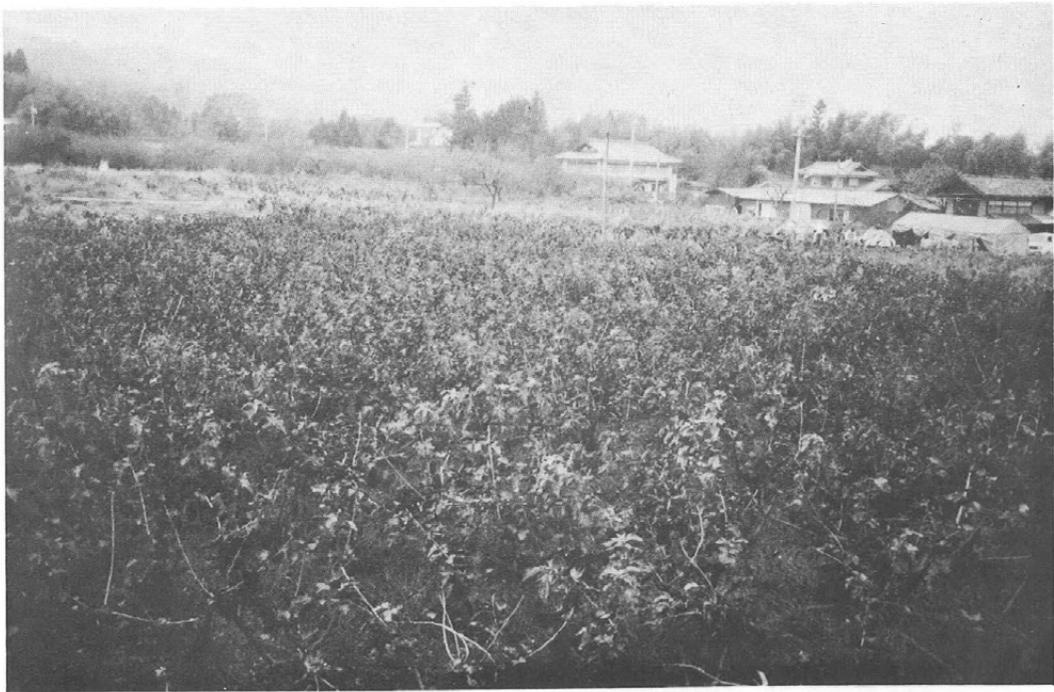
おわりに 本次調査にあたって全国産業ジュニアリーダー会議の御理解、地主中島勝美氏の御援助があり、連日の雨にねばる粘質土にめげず作業にあられた作業員の方々の御努力に深謝したい。

（佐藤 甞信）

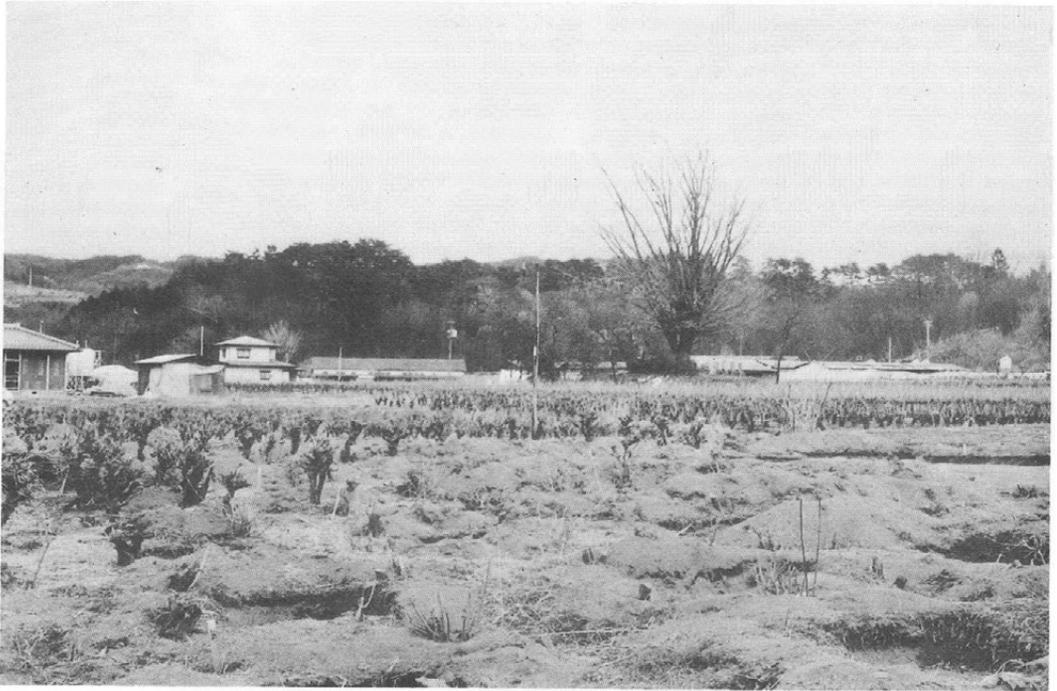
図版 I 遺 跡



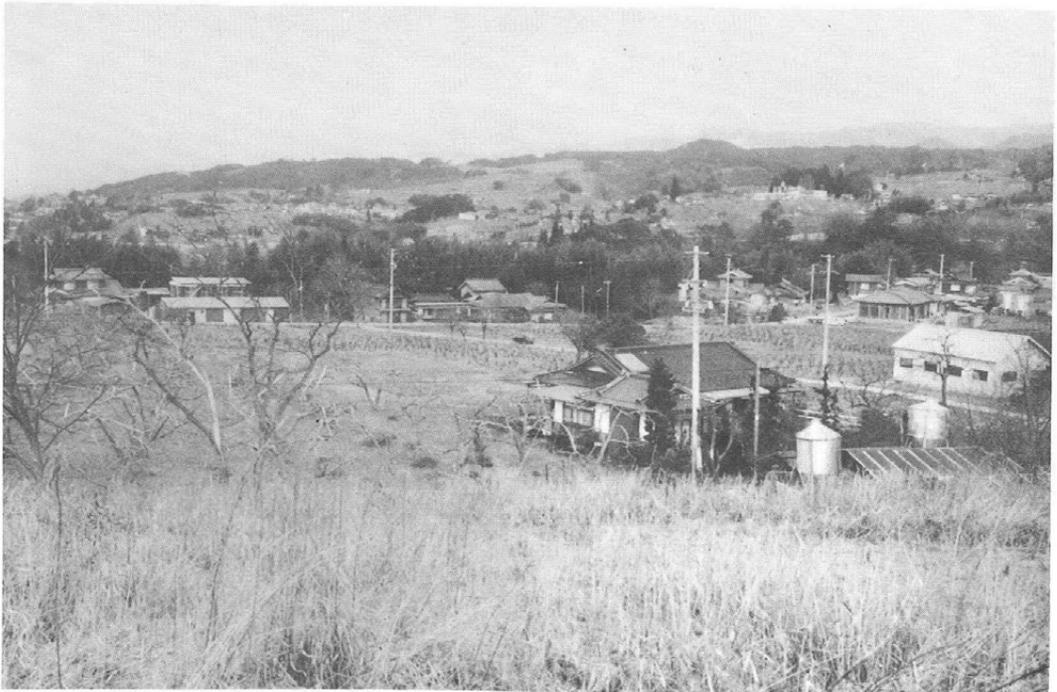
西から



東から



工事着工直前 — 西から



工事着工直前 — 南から

図版Ⅱ 調査ピット



調査ピット例



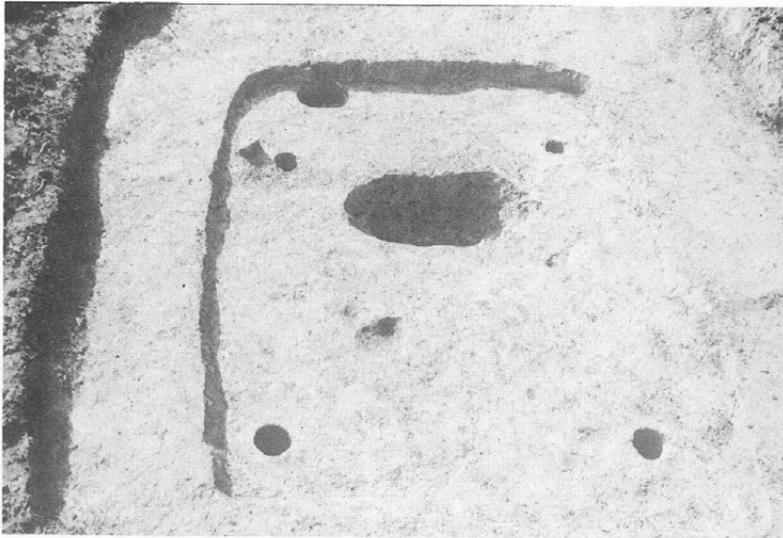
調査ピット例



調査ピット例

図版Ⅲ 遺 構

1号住居址・土坑1号 — 南から



1号住居址・土坑1号 — 北から

1号住居址磨製石鏃出土状況





土坑 2 号



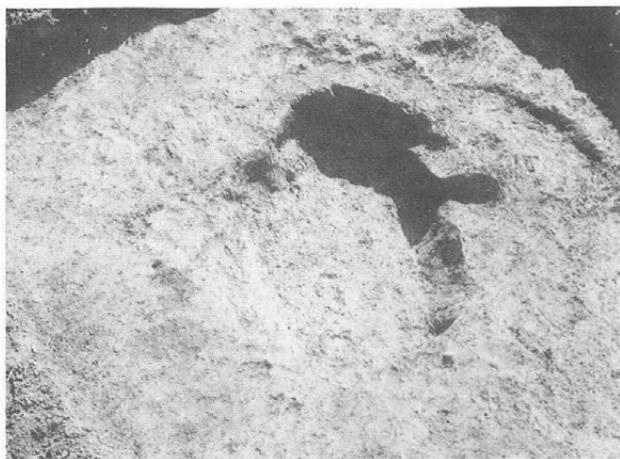
土坑 2 号土器出土状况



土坑 5 号 (左), 土坑 6 号 (右)



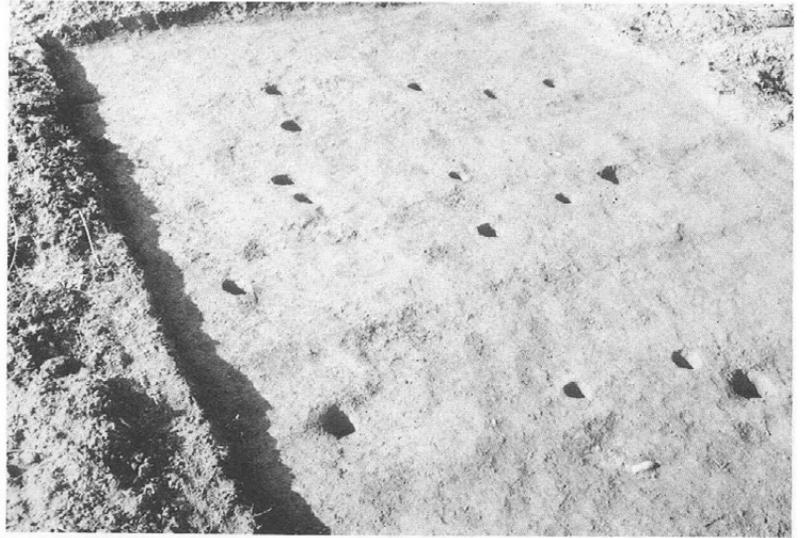
土坑 3 号



土坑 4 号



建物址 1号 — 西から

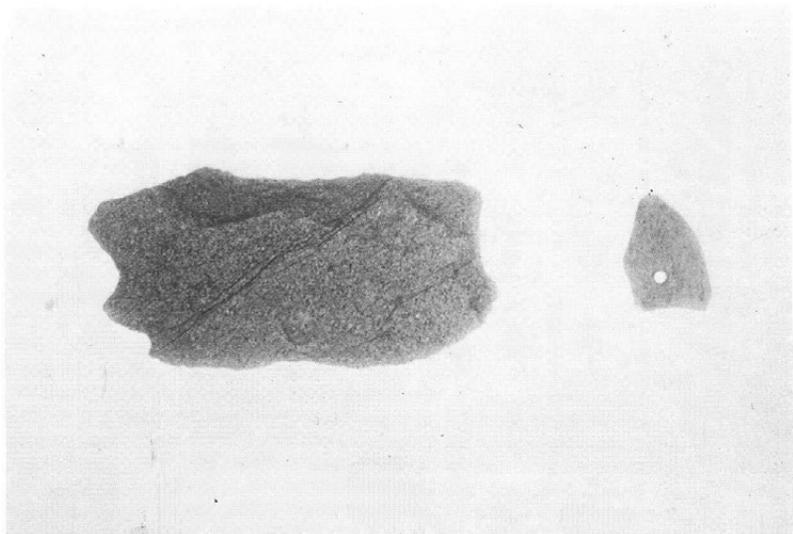


建物址 1号 — 東から

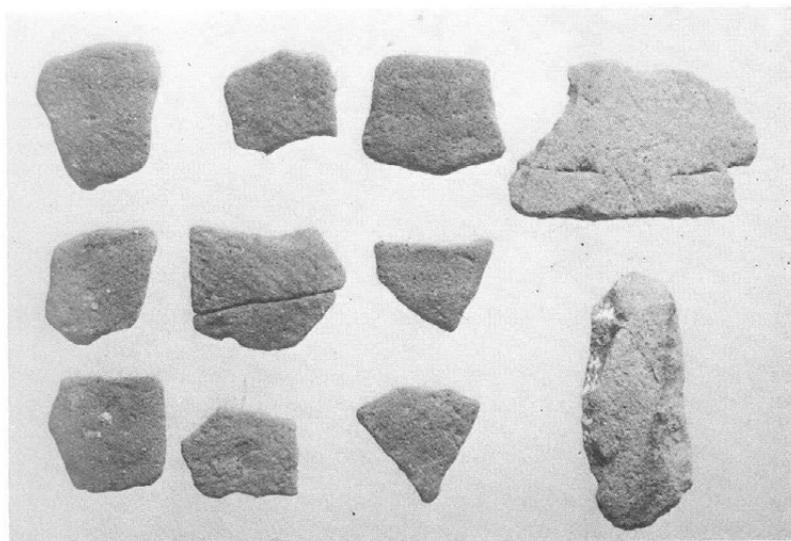


溝 址

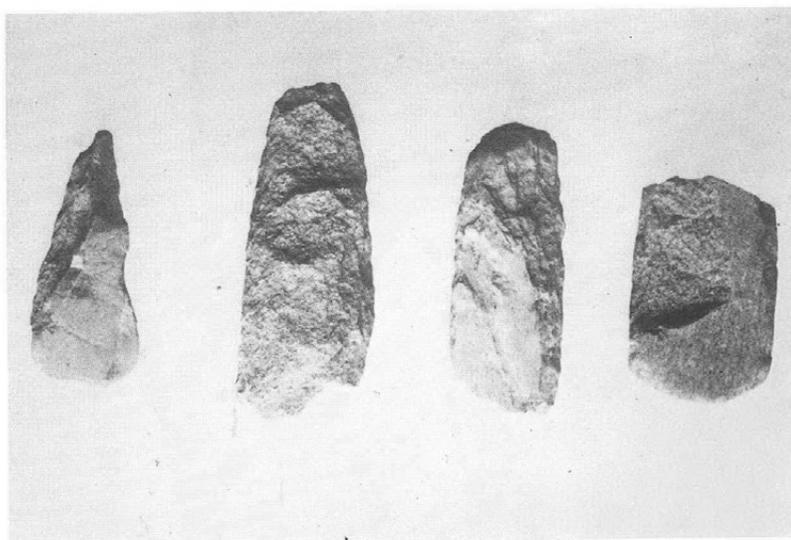
図版IV 遺物



1号住居址出土打製石庖丁（左），
磨製石鏃（右）



土坑2号出土遺物



1号上層出土石器（左2こ），
土坑5号出土石器（右2こ）

図版V 発掘スナップ



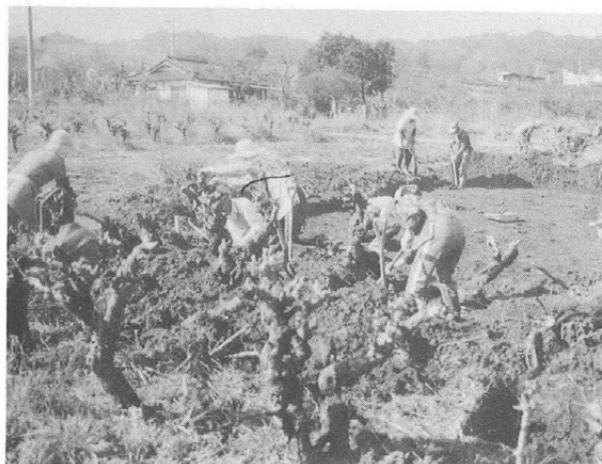
調査にかかる

1号住居址検出表土排除作業



1号住居址検出表土排除作業

建物址調査



調 査 組 織

1. 東原遺跡埋蔵文化財調査会

林 研 二	飯田市教育委員会教育長
小 林 三 郎	飯田市経済部長
福 井 実	飯田市教育委員会教育次長
坂 下 幸 彦	飯田市観光課長
竹 村 宗 丘	飯田市教育委員会社会教育課長
佐 藤 甦 信	日本考古学協会員

2. 調 査 団

団 長	佐 藤 甦 信
調査員	牧 内 住 子

3. 指 導

長野県教育委員会文化課

4. 事 務 局

飯田市教育委員会社会教育課	
竹 村 宗 丘	社会教育課長
池 田 明 人	“ 文化係長
小 林 正 春	“ 文化係
岩 崎 伝 一	経済部観光課係長
清 水 可 晴	“ “ 観光係

5. 作 業 員

福 島 明 夫	北 村 重 実	柳 沢 八重子	大 島 利 夫
落 合 節 子	近 藤 寿 美	吉 沢 徳 男	柘 植 勝 次
関 島 久 美	下 平 米 一	下 平 幸 江	久 保 田 正 勝
牧 内 八 代	原 田 春 子	棚 田 たちえ	唐 沢 里 美
高 田 久 子	熊 谷 よし子	三 輪 己 秋	古 川 隆 司
吉 沢 文 三	熊 谷 四 郎	木 下 辰 雄	竹 中 寿 夫
牧 内 東 み江	佐 藤 いなゑ	田 口 さなゑ	

お わ り に

伊那谷の自然景観を代表する天竜峡は、貴重な文化財として名勝に指定されていますが、近年の社会環境の変化により、単なる観光対象としてのみでなく、より有意義な利用活用のできる場となるよう、飯田市としても検策中でしたが、ジュニア・リーダー会議によるスポーツ施設および研習施設が建設されることになり、新しい形で名勝天竜峡の文化財としての意義をより多くの人々に理解して頂けるものと思います。

一方、名勝指定地外に建設されることになったスポーツ施設用地は、埋蔵文化財包蔵地として早くから知られた場所のため、発掘調査を実施し、記録保存を行なった次第です。

調査は11月初旬に行ない、弥生時代後期の住居址が発見され、隣接する大明神原遺跡との関連から意義あるものでした。

当初の予想より、遺構・遺物の発見が少なかったとはいえ、雨が降り続き、水はけの悪い地層のため排水等に苦慮する調査であったが、期間・予算ともに限られた中で精力的に調査にあられた、佐藤魁信調査団長をはじめ関係各位のご努力があってこそのものであります。

また、報告書作成にあたっては、佐藤団長の長年の経験による迅速な整理作業により、記録保存の完了できましたことに深く敬意を表します。

飯田市教育委員会

天 竜 峡 東 原 遺 跡

埋蔵文化財発掘調査報告書

1983. 3

全国産業ジュニア・リーダー会議
長野県飯田市教育委員会

印 刷 株式会社 秀 文 社
